
てんじょうのうたひめとよるのばけもの

坂上ジュンヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

てんじょうのうたひめとよるのわけもの

【Nコード】

N2762P

【作者名】

坂上ジュンヤ

【あらすじ】

天上の歌姫とある若者のお話を童話調でお届け。

ダークな感じが強い話ですので、

苦手な方はご注意くださいませ。

…ある不幸なわかものは、偶然街で見かけた劇団の歌姫に恋をしました。しかし、彼は恋というものを知りません。だから彼はある妙案に至ったのです。…

(一) ああ、ふこうなるかな！

むかしむかしある所に、一人のわかものがおりました。

名前はライルと言います。

そのわかものはとても美しい見た目をしていました。

人当たりもとても良く、氣立てもいい、素敵なわかものでした。

ただ、不幸なことにそのわかものは生まれた時から悪魔に呪われていたのです。

日が沈み、夜が訪れると、わかものの身体は悪魔のそれと違わない、とても醜いものになってしまうのです。

大きく、愛嬌のある青い眼は血走り濁った深紅の眼に。

黒くつやのある髪はよじれ荒れた髪に。

歯や爪すら、柔らかな肌なら軽々と裂いてしまえるくらいに鋭くなるのです。

そんな有様でしたから、わかものは幼いころからまともな生活など出来ませんでした。

わかものは母親の顔も、父親の顔も知らず、

スラムでうずくまるように過ごしてきました。

しかし彼自身、自分の体が忌むべきものであると分かっていましたので、

自分は街の暗がりで、薄汚く命を繋いで生きていくのだろうと、諦めていました。

ある日の夕方、わかものはその日の分のパンを手に入れ、

大通りの隅を歩いていました。

まだ日は幾分か高くはありましたが、わかものは少し早足で家路を急ぎました。

しかしその日何やら人が多く、ひどく歩きづらいのです。若者は何事だろうか

人波の先を背伸びして覗き込みました。

その先では、ある劇団の客寄せが行われていました。

今度新設される街の劇場へ、劇団がやってくるというので、

その劇団が自ら、告知を行っているようでした。

きらびやかな衣装をまとった役者たちはまるで別世界の住人のようでした。

いいえ、実際、別世界の住人だったはずなのです。

這いずるように日々を生きるわかものと、輝かんばかりの役者たちとは、

到底、出会うことは無かったでしょうに、

何のいたずらか、運命は彼らを出会わせてしまったのです。

わかものの視線は、客寄せ用の簡素な舞台の真中に立つ、

美しい歌姫にくぎ付けになっていました。

一座のメインを張っているらしいその歌姫は、

可愛らしい姿に美しい歌声。

それはまるで天使のようでした。

わかものはしばらくその歌姫以外目に入らなくなり、ぼうつと立ちつくしていました、

沈みかかる夕陽に目を刺され、我に返ると慌てて家へ走りました。

家路の途中も、家に帰りついてからも、

わかものの頭からは、あの歌姫の姿が離れませんでした。

歌姫の姿を思い浮かべるたびに胸が苦しくなり、

わかものは夜に変わり果てた身体を折るのです。

わかものもしも、片親とだけでも、いいえ、

誰か他人から愛されて生きていたら、

その感情が恋であると、分かったのかもしれませんが。

しかし、不幸なるかな、わかものは好きというものが分かりません

でした。

誰からも、一度も与えられたことのないものを、分かることなどできません。

だから、わかものはこう思ってしまったのです。

「欲しい」と。

欲しくて欲しくてたまらないものの、

わかものと歌姫では、まず接する機会などありません。

生きる世界が違うことも、わかものはちゃんと分かっていました。だから、わかものは頭を巡らせました。

わかものが呪われていたのは、外見だけではなかったのかもしれない。

まるで、いいえ、まさしく悪魔の知恵に至ったわかものは、ゆっくりと笑いました。

「僕が地べたで、彼女が天上ならば、簡単だ。墜ちてきてもらえばいい」

わかものは自身の名案に一つ手をたたくと、

明日からの計画実行の為の準備にとりかかりました。

(二) ひるのわかもの

わかものは次の日の朝、すぐに劇団の泊まっている所までやってくると、

どうか共に働かせて欲しいと頼み込みました。

幸いにして、昼のわかものは見目も良く人当たりもよかった為、団長はすぐにわかものを迎え入れました。

その日から、わかものは劇団の雑用係として働き始めました。

荷物を運んだり、大道具を担ぎ出したりと、

わかものは一生懸命に働きました。

劇団の仕事は室内でのものも多いので、

どうしても日没に気付かない事もありましたので、

そのたびにわかものは、誰にも見られないようにそそくさと劇場を出るのでした。

しかし、わかものがいくら隠そうと、

異形というものは特に目につきやすく、人の口に引き出されやすいものです。

いつからか劇団の中一つの噂が流れ始めました。

夕暮れ、日も落ちて誰が誰だかわからない黄昏時、

恐ろしい姿をした化け物が、劇場の中を徘徊するのだと、いう話です。

劇団の中で一番口さがない、うわさ好きのやかましい男が、いつもの調子でその話を口に上げると、

車座になって休憩していた男たちがどっと声を上げました。

「おいおい、カルタカ。まーた変な噂話かぁ？」

「この業界で怪談話とか、一番ハヤンねえぞお」

「誰かが衣装ひつかぶってるの見間違っただろ」

やんやと騒ぐ男たちを抑えるように、

カルタカと呼ばれた噂好きの男は、

年頃の男にしては少し高い声で続けます。

「今度は本当だって！オレ見たんだよ。真っ暗な所に逃げてく化け物！

肌は岩みてえだったし、ありゃあ本物だよ！」

それでもまだ信じずににやにや笑う男たちを見回して、焦れたように声を上げ、

「本当だって、背格好だって覚えてるんだぞ！」

噂好きの男は一同を見回し、わかものの腕を引いて、

「ちようどこのくらいだよ！」

と示しました。

一同は、きょとんと目をまるくするわかものと、

噂好きの男を見比べたあと、一度静まり、

すぐにその日一番大きな笑い声をあげました

「お前：っひひ：っ言うに事欠いてライルかよ！」

「お前の言う怪物ってのは色男のことかよ！」

「ハハハ！色男こわーってかあ？」

なかには笑いすぎで呼吸が苦しくなっている者もいます。

大騒ぎする一同に噂好きの男は怒鳴ります。

「違うって！だから、背丈の話だって言ってるだろ！」

ひとしきり笑った後、一同の中の一人が、わかものの顔を眺めて言います。

「でも、ライルは本当、色男だよな。小奇麗にしてりゃ、役者の中に混じっててもわかんねえよ」

一人がそう言うと、また他の者がにやっと笑いました。

「でー？その色男さんには、意中のお方はいるのかい？」

「あーっ、楽団のレミリアは勘弁してくれよ！」

今度俺が告白しようかって所なんだから！」

「衣装のローレルニア辺りはどうだ？狙い目だと思うけどよ」
口々に話す男たちを眺めた後に、わかものは一つ微笑むと、

「僕は、ヴェロニカがいいな」

と告げました。

男たちはそれにまた笑い声を上げると、

「いくらお前でもヴェロニカは無理さ！」

「高嶺の花すぎて、最早俺らとは住む世界が違うわな」

「天下の歌姫だぜ？美人は美人だけだよ」

とまた口々に零します。

そしてまた誰かの言葉で別の話題に流れていくなかで、

誰にも聞こえないように、わかものはもう一度呟きました。

「僕は、ヴェロニカが欲しいな」

(三) であい ふれあい

またある日、わかものが役者に支給する飲み物を運びいれている時、一人の女性が声をかけてきました。

「ねえ、ごめんなさい」

鈴を転がすような声にわかものが顔を上げると、

女性はすまなそうにわかものに言いました。

「それ、今日の練習の時に配るお水よね？」

：ね、一本だけ先に貰えない？ 喉が乾いちゃって…」

わかものは少し微笑んで、

「ああ、かまわないよ。はい、ヴェロニカ」

と、箱の中から一本、瓶を取り上げて女性に向かって緩やかに放りました。

女性は少し慌てて瓶を受け取ると、わかものの方を見て、

「あら、私の名前をご存じ？」

と問いました。

わかものはまた少し笑って、

「そりゃあ、この劇団であなを知らないなんてもぐりでしょう。

劇団トップの歌姫」

とからかうように言いました。

女性は花のように笑うと、

「あら、ありがとう」

と少しおどけて答えました。

女性は水を少し喉へ流し込むと、わかものの顔をしばらく見て問いました。

「あなた、役者の人？」

「いや？ ただの荷物運びだよ」

「あら、そうなの？ 綺麗なお顔をしているから、てっきり役者だと

思ってたわ」

女性は少し驚いたようにそう言いました。
わかものは微笑み、

「そう、ありがとう」

と答えました。

「でも僕は、演技はやったこともないしなあ」
そうわかものが笑うと、

「あら、最初はだれでもそういうものだわ」
と女性もころころ笑いました。

「…それじゃあ、私そろそろ行くわね」

と女性が踵を返し、その途中で思いついたように手をたたきました。

「そうだ、あなたのお名前、教えてもらえる？」

わかものは嬉しそうに笑って、

「ああ、ライルって言うんだ。よろしく」

と答えました。

「ええ、ライル。よろしくね」

と、女性も柔らかく微笑みました。

その日からその女性―うたひめヴェロニカは

何かとわかものを気に掛けるようになりました。

自分の荷を運ばせるのにわかものを指名したり、

控室での話し相手に誘ったりしました。

昼のわかものの姿が美しかったからなのかはわかりませんが、
うたひめとわかものの間はすっかり縮まって行きました。

悪魔はわかものに微笑んだのです。

わかものは考えていました。

うたひめがうたひめ足り得るのは、
あの美しい声があるから。

自分もあの声は好きだけれど、彼女を手に入れる為になら
犠牲になっても仕方ない。

ずっと一緒にいたい。

でもそれだと夜の醜い自分も見られてしまう。

それなら彼女の眼を奪ってしまえば良い。

視力と声が無くなれば、きっと彼女は自分の所まで落ちてきてくれる。

わかものは残酷にも、美しいうたひめから声と光を奪おうと企てたのです。

決めてしまってから簡単でした。

薬屋から毒を、

決して死なないけれど、五感に障害を与える毒を、

ちょうど声と光を奪ってしまえるくらい、

細かに調整して、整えました。

道具を手にしてしまえばあつという間。

ある夜の公演の日、わかものはこっそりうたひめの楽屋へ入りこみました。

もうすっかり夜で、わかものはばけものの姿になっていたので、
だれにも見つからないように、入り込みました。

まあ、仮に見つかっても、だれもわかものだとは分からなかったで
しょうが。

そしてうたひめの飲み物に、整えた毒をよく溶かし、
そそくさと劇場を後にしました。

月明かりの下、幸せそうに笑うわかものは、
悪魔そのもののように見えました。

(四) てにいれたもの

次の日、実にいつもの通り劇団へわかものが出ていくと、劇団は大騒ぎでした。

うたひめが声と光を失ってしまったというのです。

うたひめが呼んでいるというので、わかものはすぐに医務室へ向かいました。

医務室の簡素なベッドの上で、うたひめは上半身を起こしていました。

わかものが声をかけると、うたひめは泣きはらした目でわかものの方を見ました。

その眼はうつすら白く濁ってしまっていて、

あの青い瞳も好きだったわかものは少し残念に思いました。

侍医がわかものに、うたひめの容体を教えます。

それは、「声はもう戻らない。視力も著しく落ちてしまつて、物の形程度しかわからないが、字を書くくらいなら何とか可能である」

というものでした。

わかものはそれを聞いたあと、うたひめの手を優しく握りました。

うたひめはそのぬくもりにまた、大粒の涙を零します。

その喉からはいくら待っても、意味をなす音は一つも聞こえませんでした。

わかものはうたひめに優しく問います。

「ヴェロニカ、団長はなんて言ってる？」

うたひめは手元の紙にゆっくりと答えを書きます。

目がよく見えないので、その字はとも読みづらいものでした。

わかものはそれをゆっくりと読み解きます。

『空気の良い田舎で休みなさいって。

家は貸してあげるから、落ち着いて暮しなさいって』

震える字で書かれたそれは、事実上のお払い箱宣言でした。

うたひめは、いいえ、この劇団の者は孤児が多く、家族など他にいなかったのです。

わかものはうたひめの頭を優しく撫でると、一つ告げました。

「：ヴェロニカ、そこに、僕も連れて行ってくれないか」

うたひめはそれを聞いてひどく驚いたように目を見開くと、

わかものの方を覗き込みました。

わかものはその顔を見て、一つ微笑み、優しくうたひめに語りかけました。

「ヴェロニカ、僕はね、君と一緒に居たいんだ。

はじめて見た時から、君が欲しくてたまらなかった。

君がうたひめであろうとなかろうと、関係ない。

君の人生に、僕が付いていくことを、どうか許してくれない？」

うたひめは大きな瞳からぼろぼろと涙を零して、何度も頷きました。

わかものはそんなうたひめを愛おしそうに眺めて、

溢れる涙を、指先でそっと拭ってやりました。

それから数日経ち、新しい生活への準備を整えたわかものとうたひめは

団長の用意してくれた田舎の家へ向かいました。

その家はずっと山奥にあり、なるほど空気は澄んでいましたが、

日が落ちればおそらく真っ暗で、生活をするにはなかなか不便そうな様子でした。

荷物を運びいれ、一息ついたころにはもうすっかり、辺りは薄闇に

染まっていました。

わかものの姿も、夜へと変わり始めています。

うたひめはベッドに腰掛けたまま、

ベッドサイドに置かれた不安定に揺れる蠟燭を眺めたあと、

手元の紙に小さく綴りました。

「これから、ここで暮らすのね」

わかものは少し心細そうに目を伏せるうたひめの傍らに腰をおろし、

「だいじょうぶだよ、何とかなる」

と優しく言いました。

うたひめはまた手元の紙に、

「そうね、あなたもいるもの」

と小さく書きました。

わかものはそんなうたひめを、夜の鋭い爪で傷つけないように気を

配りながら、

優しく抱きしめました。

うたひめも、わかものの腕の中でそっと目を閉じました。

ようやく手に入れたうたひめのぬくもりを噛み締めながら、

そのわけものはひどく幸せそうに笑いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2762p/>

てんじょうのうたひめとよるのばけもの

2010年12月16日00時53分発行